派兵

第三部

雪と吹雪と

高橋治

派兵

第三部　雪と吹雪と

高橋治

朝日新聞社

高橋　治（たかはし　おさむ）

1929年 千葉県に生れる。1953年 東京大学文学部卒業。同年松竹株式会社に入社。松竹において映画の監督及び脚本執筆に従事。1963年より劇団新劇場に所属，戯曲発表。1964年松竹株式会社を退社。その後フリーとなり映画，演劇，テレビで活躍現在に至る。なお1973年から1974年にかけて文化庁在外研修員としてイスラエルに滞在。主な戯曲，脚本及び監督作品「袖之木谷譚」「白鳥事件」「告発」「ゴメスの名はゴメス」「少年とラクダ」「五彩の女」など。

現住所　神奈川県逗子市新宿3—3—10

派兵 ——第三部　雪と吹雪と

定価 1300円

昭和51年11月30日第一刷発行

著　者　高橋　治

発行者　朝日新聞社　角田秀雄

印刷所　共同印刷株式会社

発行所　東京・名古屋 大阪・北九州　朝日新聞社

©Osamu Takahashi 1976

0093-254421-0042

派兵第三部　目次

第一章　流亡と鏖殺
パリ、一九七三年　12
流亡　18
聞書　ウラル戦線　27
鏖殺　37
遭遇戦　44
焼夷セリ　52
第二章　亀裂
イワン・カルムイコフ　62
脱走　71
米軍使用問題　83
逆転する歯車　94
協調　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

説得 109
第三章　不逞鮮人
三一運動 124
新韓村へ 135
ニコライエフスクへ 146
第四章　熱い五月
提案 158
外交調査会 169
承認討議 182
変化 189
第五章　大退却行

チャーチル・プラン 200
チェコ軍と日本軍 207
対決 215
ルドルフ　ガイダ 224
電話 230

第六章　別離
悪名 244
別れ 250
聞書　退却記 257
命令 273

第七章　誤れる八月
無残 284

陸相意見書 292
反論 300
干渉と前衛 309
無策 317

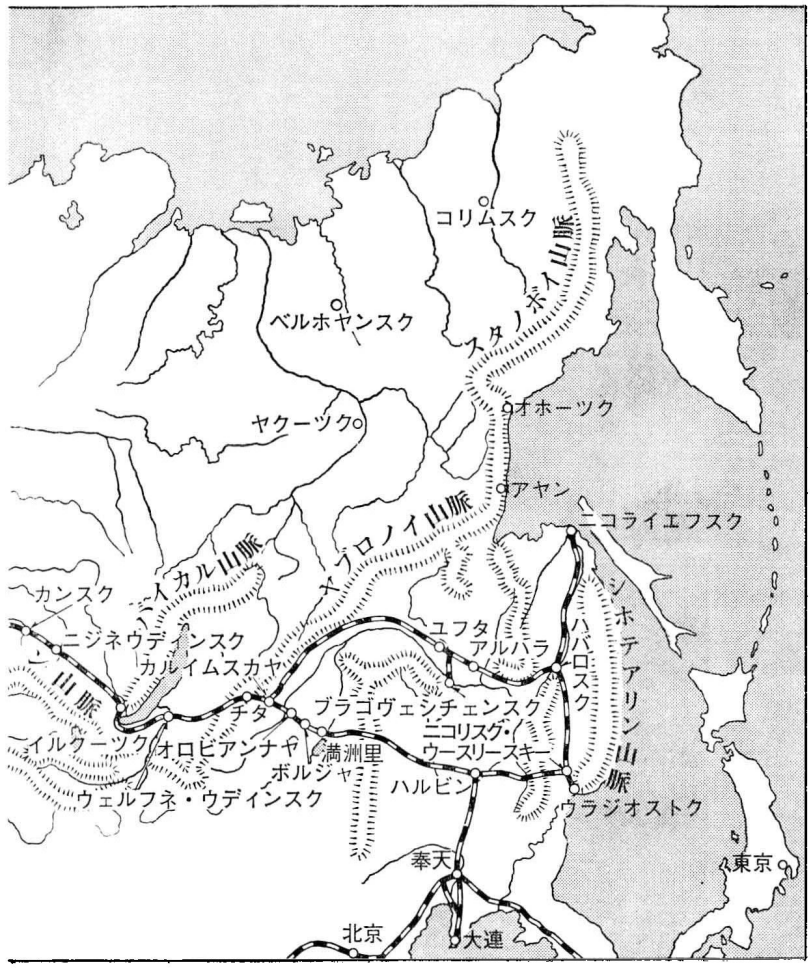
第八章　幻の大使
武官と文官 326
撤退のための着任 334
閣書　オムスク特務機関 343
ガイダ事件前説 356

第九章　鉄道戦争
モーリス大使 366
鉄路 374

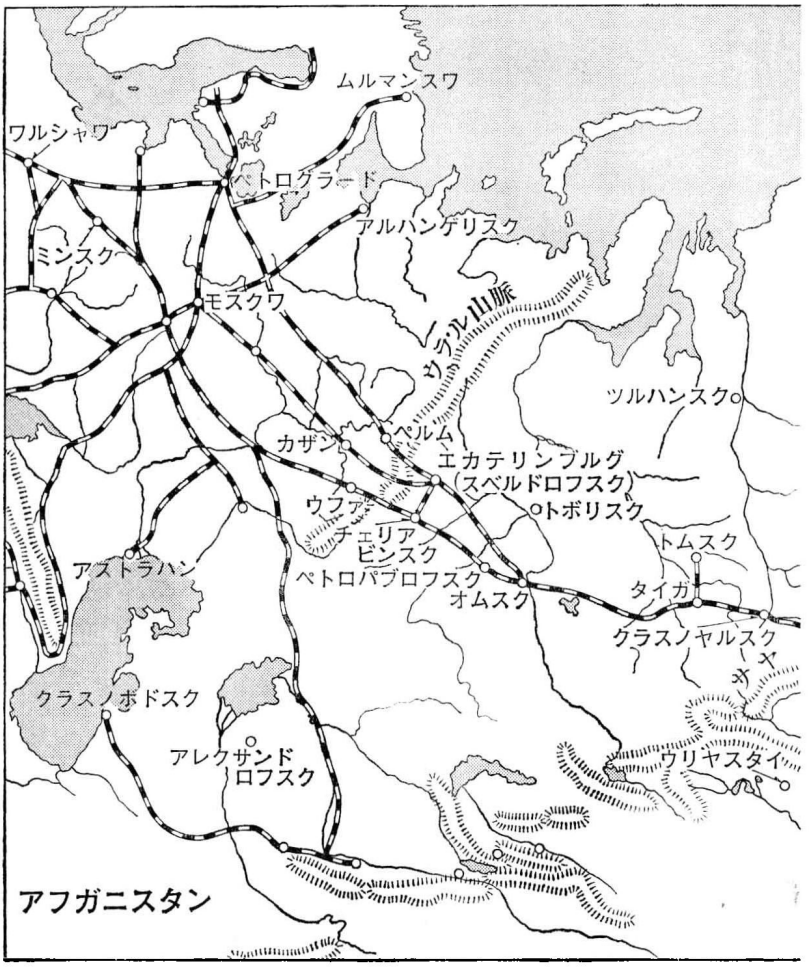
ある敗北　382
第十章　凍る日　392
川面の風　400
雪と吹雪と

装幀・鬼沢　邦
イラストレーション・上條喬久
辰巳四郎
図版・吉沢家久

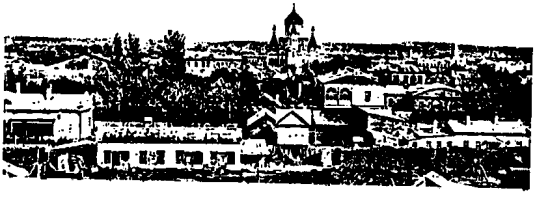
地図（ウラジオストクからモスクワまで）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


ムルマンスワ
ワルシャワ
ペトログラード
アルハンゲリスク
ミンスク
モスクワ
ウラル山脈
ツルハンスク
カザン
ペルム
エカテリンブルグ
(スベルドロフスク)
ウファ
トボリスク
チェリアビンスク
トムスク
アストラハン
ペトロパブロフスク
オムスク
タイガ
クラスノヤルスク
クラスノボドスク
アレクサンドロフスク
ウリヤスタイ
アフガニスタン

第一章　流亡と鏖殺



パリ、一九七三年

パリほど秋の訪れがさやかな町はない。
この町で、夏の日は奇蹟のように脆い。それなりに暑さの続くひとときがあっても、不逞な存在感は薄い。
そのような夏にくらべれば、秋は舞台の出を待ちもうけていた役者のように登場する。昨日まで見なかった顔が、どこかに確かにあった夏を肌の色に沈ませて、この町に帰って来る。閉ざされていた店がいっせいに開く。道に散った木の葉が時のうつろいを声高に告げ始める。
それよりなにより、陽ざしの傾きがあきらかに違って来る。肌寒さがしのび寄る。そして、ある朝ひそやかに暖房の音が部屋に戻って来る。仮定のもののようだった夏の時間が、日常そのものの秋にとってかわられるのだ。

そんな秋のある朝、私のパリの仮寓先に一人の男が訪ねて来た。
一九七三年のことである。その年、私は全世界に散った亡命者を求めて長い旅に出ていた。
パリの言葉でステュディオと呼ばれる。ひと間きりだが、浴室に簡単な台所がついたその部屋は、万事が機能的に作られている割には、豪華に天井が高かった。
ドア一枚で、ホールからつながる私のステュディオに入って来たその男は、巨大な体軀がいかにも高い天井に似つかわしかった。
「私は多分君が探している人間の一人だと思う。……君は私にいくら払ってくれるのか」
突然のことで、返事も出来ないでいる私に、彼は追うちをかけた。
「私は非常に有能な通訳だ。一時間に二〇〇フランは取る」
この件に関する長年の調査と関係各国の旅行で、私は無数のインタビューを行って来た。だが、金銭を要求されたことは一度もなかった。ましてや、支払額の単位まで明示されたことなどありようはずがない。
「ミスター、残念ですが、私は金を払ってインタビューは

しません」
「しかし、君は私のような男を探しているのだろう。僅かな金を惜しむと、重要な人間とすれ違うことになる」
彼は私が『パンセ・ルス』というロシア語新聞にのせていた関係者への呼びかけ広告を読んで来たのだった。
「あなたが重要人物という証拠がどこにあります」
「私はノックス将軍の通訳だった」
「通訳というと？」
「いうまでもないじゃないか、英語からロシア語への通訳だ」
「英語からロシア語へ？」
「そうだ、将軍はイギリス人だから」
「だが、ノックスは流暢なロシア語を話したはずですよ」
私は聞き返した。一寸したトリックだった。ノックスはロシア語を自由に操ったと書いてあるものは多い。だが事実はそうではなかったようだ。
証言。
陸軍少将、V・M・モルチャノフ。カッペル軍団所属。
「ノックスがロシア語がうまかったというのは嘘だよ。こっちのいうことはなんとかわかったようだが、自分から喋るということはなかった。いつもロシア人の通訳が側についていたよ」
ヴィクトリン・ミハエル・モルチャノフ。オムスク側最後の兵団、カッペル軍団の最終段階の指揮官である。彼のいうことに誤りがあるとは思えない。
私の、いわば、ひっかけに、訪ねて来た男は憤然と答えた。
「馬鹿な。私は将軍がロシア語を話すところなど見たこともない。私がそのための通訳だったのだから」
私は一五〇フラン（約一万円）払って彼の話を聞くことにした。金を払うことに、心情的には可成りの抵抗感があったが、ノックスについてはかねて疑問に思っていたことがあったからだ。

アルフレッド・W・F・ノックス少将。イギリス陸軍、いや連合国きってのロシア通といわれた。この干渉戦争の開始には、彼が政府に提出した意見書が、大きな影響を与えている。
いわば、シベリアに吹き荒れた嵐を作り上げた張本人の一人でもある。
連合軍のウラジオストク上陸を見計ったように極東に姿を見せたノックスは、コルチャックを伴いオムスクに乗り

こんだ。待っていたように、オムスク政府による極東乱立政権の統一、コルチャックのクーデターが起こる。誰の眼にも明らかな黒幕である。

コルチャックが壮大な悲劇を踊って見せた人形であったとすれば、ノックスこそが黒衣に身を包んだ人形のつかい手であったのだ。

〃……われわれの方針はロシアの足もとにつっかえ棒をすることではなく、自分の足で立てるようにすることだった。ノックス少将はこの目的を果すために軍事省から送りこまれたのだった。そしてそのためとあれば、彼ほど有能で資格を備えた人物はほかに見つけようがなかった……〃。香港にあったミドルセックス連隊を率いて、シベリア上陸の先陣をきったジョン・ワード大佐は著書の中にそう書いている(『シベリアでダイハードと共に』)。

これが一応はノックスに与えられた使命であった。だが、それだけだったのだろうか。

ワードが書くところの〃自分の足で立たせる〃ということ自体にも、既に色々な問題が含まれている。だがこの程度のことは、当時誰も公言してはばからなかった。侵略者の論理からすれば輝やける正義の範囲内のことだったのである。

私はその実体がなんであったのかは明確に推理出来ないが、言われている任務の背後になにかがあったのではないかと考えている。

この疑惑を裏づけるように、ノックスは著書その他で、自分の任務について、明確な記述を避け通してしまった。読む側にはなにかなし欲求不満が残る。主役が充分にその役柄を演じきれなかった舞台を見るような思いがする。

通訳だったという男から、私はその辺に迫る糸口でも見つけ出すことが出来ればと思ったのだった。

彼は恐るべき記憶力を持った男だった。私は年表を片手にインタビューを続ける。ある事件に話が触れると、私は苦労して作り上げたそのノートの頁を繰ろうとする。

「ウエイト、ウエイト」

遮ると、彼は意識を集中するように瞳をこらす。

「××××年×月××日……」

寸分誤らぬ日附が出て来る。彼にとって非常に覚えにくいはずの日本の固有名詞さえ見事に正しく記憶の底からとり出して来る。まさに、鮮やかに磨きこまれた奇術の冴えを見せられるような思いだった。

だが、私の期待はみたされなかった。もっとも、通訳に任務の奥底を見ぬかれるようでは、ノックスにも情報将校

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com